

第6回研究大会課題研究シンポジウム（概要報告） 「子どものからだ・こころ・生活体験」

古賀， 倫嗣
熊本大学教育学部

<https://doi.org/10.15017/9079>

出版情報：生活体験学習研究. 6, pp.107-109, 2006-03-28. The Japanese Society of Life Needs
Experience Learning

バージョン：

権利関係：



第6回研究大会 課題研究シンポジウム（概要報告）

「子どものからだ・こころ・生活体験」

日 時：2005年1月29日(土) 14：10～17：10

場 所：福岡県立社会教育総合センター

コーディネーター：古 賀 倫 嗣（熊本大学教育学部）

シンポジスト：時 田 純 子（大分県中津市如水保育園）

桑 原 広 治（熊本県球磨村立一勝地・第二小学校）

佐 藤 洋 美（福岡県宇美町立宇美東中学校）

コメンテーター：宮 崎 はつよ（佐賀県神崎町中央公民館）

小 原 達 朗（長崎大学教育実践総合研究センター）

課題研究シンポジウム 「子どものからだ・こころ・ 生活体験」

1. はじめに

2004年8月、文部科学省は2003年度の問題行動調査の結果を発表、「小学生の暴力行為が1777件、前年度に比べ28%増の過去最多」になったことを明らかにした。小中高生全体の暴力行為も、3年ぶりに増加した。また、いじめも8年ぶりに増加し、このところ減少傾向にあった暴力行為といじめが小中高そろって増えるという事態になった。

こうした「目に見える」問題現象の背後には、「目に見えない」問題構造が存在する。すなわち、年齢相応の発達がうまくできない子どもの社会性や「生きる力」の衰退・喪失という基本的な発達課題である。また、大人の側にも、子どもとのコミュニケーションに関わる基本的なスキルの不足が指摘される。子どもに関わる問題現象の認識はあっても、子ども理解が不十分なために対処の仕方が見えてこないという、臨床的・実践的な課題である。

こうした問題意識に立ち、シンポジウムでは、まず子どもの発達段階に即した現状と課題を明らかにし、子どもに関わるシステム（課題解決プログラム）の検討を通じてどのようなスキルや知識が大人たちに求められているか、その共有化をはかりたいと考えている。そのため、登壇者には、「子どもの発達」に即して、乳幼児期から保育園長の時田純子さん、学童期から小学校教頭の桑原広治さん、思春期から中学校教諭の佐藤洋美さんという3人のシンポジスト、「関わりのシステム」に即して、地域の教育力の視点から宮崎はつよさん、子どもの身体論の視点から小原達朗さん、2人のコメンテーターをお願いした。いわば、子ども問題の「目に見えない」構造を、「子どもの発達」というタテ糸と、「関わりのシステム」というヨコ糸からどのように「目に見える」タペストリーとして編み上げることができるか、それが本シンポジウムの課題である。

さらに、編み上げたタペストリーは、TPOに合わせ効果的な使用が可能でなければならない。シンポジウムでは、子どもの問題状況に対し、的確に「診断」し「効果的な処方箋」を書くこと、すなわち、具体的

な場（「居場所」）における子どもに関わるコミュニケーション・スキルの共有化を目的としている。

2. 子どもの発達に関わる現状と課題

まず、第1ラウンドの発言では、子どもの具体的な問題状況を指摘し、どこに発達課題があるか、的確に「診断」することを目的とした。そして、その「診断」には子どもの発達段階に応じた固有の問題点と、子ども全体に共通な問題点との2つのアプローチが必要になる。

トップバッターの時田さんは、保育所のほか、学童保育（6年生まで受入れ）と子育て支援センターを担っており、2か月から10歳までの子どもを対象としていることから、10年間を見通した子どもへのアプローチが可能な立場である。そうしたなかで、食べる（摂食）、寝る（睡眠）、遊ぶ（活動）、出す（排便）、甘える（愛着）という、5つのキーワードを「診断」項目として提起した。「野菜が食べられない」、「ケンケンできない」など具体的な問題状況を示して、体になじむような畑作りしたところに植えたじゃがいもを食べるような働きかけ、リズム運動や登山などによる身体能力の向上といったプログラムを紹介した。また、親子関係について「合言葉は斜めの関係」として、わが子しか目に入らない保護者に隣の子を見ることを勧め、それにより「発達」という先を見通す力が生まれ、「今はこの段階、待てばいい」という親の安心につながると強調した。

桑原さんは、小学生の現状について、食事・着脱・排便など基本的な生活習慣の未確立と不規則な生活リズム、対人コミュニケーション能力の未形成という、2つの問題点を指摘した。例えば、低学年では「何となくきつい」としか言わない子ども。どうしたのと尋ねると「わからない」。高学年では、保護者の期待の前に「失敗を恐れる子ども」。これに「叱り方を知らない保護者」と「途中でストップを掛ける教員」。子どもには自分で行動し、判断するプロセスの全体を体験させる工夫が求められていると「診断」した。

佐藤さんは、中学生について、「しゃべりつづける子ども」と「話せない子ども」の共存、生物としての独立性、社会性の課題、インターネットや携帯電話という時代特性の3項目を問題点として示した。特に「思

春期」という発達段階に即して、「性的」な関心・行動が「どうしようもない衝動」として起きてくると「診断」。変化していく子どもに直接向き合うことが中学校教員の役割であり、大人もまた、子ども一人ひとりに応じた向き合い方のスキルをもたなければと訴えた。

コメンテーターの立場から、社会教育行政職員の宮崎さんは、神崎町中央公民館で行っている子ども事業の中で経験した現状を「診断」、興味の有無で活動への関わり方の差が激しい、「いや」「好き」など単純な言葉しか使えない、我慢すること、耐えることができない、といった問題点を指摘した。また、小原さんは、「体(物体としてカラダ)」「からだ(生身のカラダ)」「身体(からだ+文化)」の3つを区別すること、「右下がりの体力」と「右下がりのこころの問題」が連動していることを強調した。具体的な事例として、今の子どもは50m走と垂直飛びの能力は下がっていないのに、走り幅跳びはダメになった。なぜなら、走り幅跳びには2つの運動能力を結びつける「技(わざ)」が不可欠だからという「診断」には説得力があった。

3. 子どもに関わるプログラムとコミュニケーション・スキル

第2ラウンドの発言では、指摘された「診断」に対する「効果的な処方箋」を、課題解決プログラムとして提案することによって、コミュニケーション・スキルの共有化をはかることを目的とした。

まず、時田さんは、日録や生活記録の重視、多様な子どもの存在の認め合い、子どもの「生きる力」を引き出す活動プログラムという3点を柱に、キーワードは「子どもを真ん中にする」ことだと強調した。保育園での子どもの活動で「どうしたんだろう？」ということが出てくる。体調、睡眠時間、摂食状況など、その日の記録があるから子どもの抱えている問題が的確に把握され、適切な対応をとることが可能になる。また、「噛む」というある年齢には特有の行動を具体的な事例として、0歳から5歳まで、いろいろな子どもの発達のすがたを知ってもらうことによって、「年長」になったときどういうすがたになるのか、その見通しに気づいてもらうことが活動プログラムの目的だと述べた。

桑原さんは、「教えられていないことはできない」「体

験していないことはできない」という生活体験学習原理に基づいて、教員や保護者向けのプログラムの基本方針を提案した。明らかにされるべきは、何を、どういうタイミングで教えたらいいかである。意識のある保護者はきちんとできる、意識のない保護者は？まさに「依存的コミュニケーション」の問題だと述べた。教員も、子どもの「つぶやき」を生活の中から聞き出すアンテナの出し方、張り方、受け止め方のスキルが重要となっている。本来の「生きる力」が大人にも試されていると訴えた。

佐藤さんは、子どもとの関わり方のベースにあるのは「自尊感情」をどう生み出させるかにほかならない。思春期は「私」を探し出す時期であり、「私のこと」でプラス/マイナスに揺れ動く葛藤の中にある。こうした子ども理解を踏まえ、①「1対1」の会話の場面の設定、②「ムカツク」という言葉の背後にある真実を読み取る力、想像力の育成(関係のとらえ直し)、③子どもとの「対立」を避けないスタンス(「ものわりのいい大人」になるな)、④自分と他者はまったく異なる存在だという距離の置き方(だから「いやなヤツとうまくやること」が可能)、この4項目をキーワードにすれば効果的な問題解決プログラムが提案できると主張した。

コメンテーターからは、宮崎さんが地域の老人クラブなど「地域の教育力」の出番によって、「親でもない、教師でもない大人」から教えてもらう体験が耐性の育成につながり、また、地域の大人も「子どもが喜んでくれてうれしかった」というきっかけからより大きな「教育力」を作りだすことが可能になると指摘した。公民館だけではなく、社会福祉協議会の役割も大きいと補足した。小原さんは、「身体」をキーワードに4人の発言を総括、時田さんからは、「あまえる」「あまえさせる」という抱きしめる身体関係、桑原さんからは、子どもの身体について「賢い身体と丈夫な頭(脳)」というパラドックス(逆説)、佐藤さんからは、「飲み込むこともできない、吐きだすこともできない」ムカツクという身体状況、宮崎さんからは、「身構えが心構えをつくりだす(しゃきっとする/でれーとする)」段取り力の重要性を、それぞれ指摘した。

4. おわりに

「目に見える」問題現象の背後にある「目に見えない」問題構造を解明するために、まず、シンポジウムの前半では「目に見える」問題の現状と問題点の「診断」、後半では、子どもに関わるシステム（課題解決プログラム）の提案を行った。

これを受け、フロアからの質疑に入った。時田さんには、「泣く」「噛む」といった子どもの行動をどう受け止めたらいいいのかなど、提案のより外延的な意図を確認する質問、桑原さんには、発達段階に応じたコミュニケーション能力の育成方法、佐藤さんには、こうした問題事象に対し学校ができることとその限界を尋ねるものであった。意見としては、横山正幸会長から、「すがたを見て学ばせる」ということの意味の重要性、「言葉の先取り」によって喜び、悲しみを伝えるためのコミュニケーションを子どもから奪っている現実など、コミュニケーション・スキルの習得に関する課題の指摘があった。

シンポジウムの開催趣旨として冒頭、「目に見えない」問題構造を、「子どもの発達」というタテ糸と、「関わりシステム」というヨコ糸からどのように「目に見える」タペストリーとして編み上げることができるか、それがシンポジウムの研究課題であると述べた。参加いただいた皆様には、シンポジウムの議論をお聞きいただく過程でどんな編み目やデザインが見えてきたであろうか。最後に、全体を貫くグランドデザイン

を描いて、報告を閉じさせていただきたい。

「子どもの発達」というタテ糸から見えてきたものは、不断に進む「こころとからだの乖離」による生活リズムの混乱、「甘えること（愛着）」と「我慢すること（耐性）」のアンビバレンス（両面価値）、そして「年齢不相応」の発達という現実である。乳幼児期・学童期・思春期という子どもの発達段階に区分させた、シンポジストの構成によって、子ども問題がもつ固有性／共通性の課題がいつそう明らかになったといえよう。これに対し、「関わりシステム」というヨコ糸からは、発達を「見通す」ための生活体験記録（データ）の必要性、「叱ること」と「待つこと」のタイミングの取り方、子どもの「自尊感情」を引き出し「信頼関係」を構築するコミュニケーション・スキル、というそれぞれの発達段階で最優先されるべきプログラムの核心（コア）が指摘されるだろう。そして、その3つの発達段階での子どもへの関わり方のキーワードを示すならば、「受容」、「均衡（バランス）」、「自立」ということになろう。いずれのキーワードも、「こころ」と「からだ」の関係の在り方を示していることにご注意いただきたい。

最後に、長時間にわたり課題研究の深まりのために、「こころ（熱意）」と「からだ（頭脳）」を提供いただいた、5名の登壇者に厚くお礼申し上げたい。

（報告：古賀 倫嗣）